

## 水 と 緑

10月初旬、中東の国ヨルダンへ旅した。かの地は乾期の終わりの時節で、北海道よりやや広い国土が全て乾ききっていたという印象が強く残っている。

旅の目的は、全農が日本企業3社、ヨルダン側企業2社と合弁事業で肥料生産をおこなっている現地の工場視察である。

中東、ましてやアラブの真っ只中の国への旅は初めてである。ヨルダンの隣国イラクにたいするアメリカの軍事的行動展開が不透明なことや、西に隣接するイスラエルでの頻発するテロ事件などが、旅行中どのような影響を及ぼすかがよく見えない中で、家内はもちろんだが周囲の漠たる不安感があるのを何気ない言葉の端はしに感じての旅立ちであった。

パリ経由で首都のアンマン空港に到着して、入国審査を受ける人込みの中で疲れのいり混じった緊張感と日本にはないカリッとした暑さ、汗とも違う独特の匂いにつつまれていた。

日本では考えられないことだが出迎えの現地出向職員の方々は、まだ入国審査も税関の手続きもまったく終わっていないわれわれのところまで入ってきて挨拶を交わし談笑しているではないか。警備の姿が少しも目につかない。単なるいい加減さのものといえはそうかもしれないが、日本やEUの空港の何かよそよそしく取り澄ました感じのものとは異質の、人なつっこさを感じさせる感覚である。日本で思っていた不安感や危機感が薄らいでいくのを覚えたし、旅行中にもそういったものを感じたことは一度もなかった。

国土の80%が砂漠で、その国土の60%にリン鉱石層があり推定埋蔵量は100億トンという。経済的にはこれを原料とする肥料関係を除き主だった産業がなく貿易収支は恒常的な赤字という。人口増と食料生産供給の絶対的不足による食料輸入の増加、エネルギー源の石油はイラクなど近隣産油国から100%輸入という形でこの国の経済を圧迫しているようである。

農業振興と食料増産は重要な経済問題であるが、ヨルダン農業の宿命として常に水不足の問題に直面しており水は国の管理下にあり貴重な資源である、との説明はバスで移動を始めてからヨルダンを離れるまで、常に実感として強く感じていた。

アンマンから紅海に面した肥料工場のあるアカバまでの高速道路、デザートハイウェイを約300km南下、行けども行けども茫漠たる土と石だけの砂漠ならぬ土漠が続く。見渡す限り緑の草木は1本も見当たらず。いや正確に言うと集落のあるところで数本の木はあった。夜に水の注入でようやく生きているが根は張らないとのことで、少しの風でも横に倒れるのでお辞儀をしているように見える。

ベドウィン(遊牧民)の羊が放牧されているのが散見される。枯れ草しか見えずその羊の群れのところから土ぼこりが立っており、あの羊たちはいつ水が飲めるのかが気になる。

途中にある町の近くのハイウェイの両側にポツンポツンと見える家には水道管はきていない。国の給水車により水の供給を受け家の上のタンクに貯水して使うという。ベドウィンも電気は駄目だが水だけは供給を受けることができるそうである。先ほどの羊たちもこの水を飲むのである。命の水というがそのとおりだとつくづく思われた。

ヨルダンの気候は大きく3つのエリアに分けられるが、一番雨量の多い北西部でも年間500mm前後で日本の3分の1程度、農業が比較的盛んなヨルダン渓谷地帯でも200mm前後で国による灌漑設備が整備されている。東部、南部は乾燥砂漠地帯で雨はほとんど降らない。死海の近くまで来ると地下水をくみ上げて、野菜や果物の栽培が行われているがビニールでマルチがされている。日本では地温を保つためだがヨルダンでは水の蒸発を防ぐためである。ところ変われば同じことでも意味が違うのである。

アンマンから南部の町アカバを、行きは砂漠の真ん中のデザートハイウェイを、帰りはイスラエルとの国境沿いの道をバスで通りぬけたが赤茶色の土と石だけで、緑は水を供給されたところだけにある。水の力と重要性をこれほど認識させられた旅は無い。

王様の屋敷は塀で囲まれた緑の林の中にあった。緑は富と権力の象徴であるという。日本は何であろうか。水と緑豊かな日本を再認識し、しっかり守っていくことが大事ではないか、と心から思った旅であった。

(北海道 浜中町農業協同組合・代表理事組合長 石橋榮紀・いしばしげのり)